

対称群の線形表現の性質, スピン表現の性質に関する Schur の 2 論文について

平井 武 (京都)

ここでは Schur の次の 2 つの論文について検討する：

[S11, 1908] I. Schur, Über die Darstellung der symmetrischen Gruppe durch lineare homogene Substitutionen, Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften 1908, Physikalisch-Mathematische Klasse, pp.664–678.

[S58, 1927] J. Schur, Über die reellen Kollineationsgruppen, die der symmetrischen oder der alternierenden Gruppe isomorph sind, Journal für die reine und angewandte Mathematik, 158 (1927), 63–79.

[S11, 1908] では, 対称群 \mathfrak{S}_n の線形表現について次を示した：

(1) \mathfrak{S}_n の既約線形表現が整数環 \mathbb{Z} 上の行列で与えられる.

19 年後の論文 [S58, 1927] では, \mathfrak{S}_n のスピン表現 (=射影表現) について次を与えた：

(2) \mathfrak{S}_n の既約スピン表現が \mathbb{R} 上の行列で与えられるための必要十分条件.

この 2 論文を比較研究する. 線形表現とスピン表現とでは, 何故これらの違った結果が出るのか? 結果が出るのに何故そんなに時間差があるのか?

それと同時に, 先行する Frobenius の「有限群の表現論」に関する数論的結果, Frobenius-Schur [F75] の共著論文における同方向の結果, についても並行して論ずる.

Contents

1	Frobenius による有限群の指標と表現の一般理論における数論的側面	2
2	Frobenius の証明 [F54] の根拠, Dedekind の定理	4
2.1	Gauß, Disquisitiones Arithmeticae, Art. 42	4
2.2	代数的数と代数的整数の場合, Satz V	6
2.3	代数的数・代数的整数の場合の証明	6
3	Frobenius による \mathfrak{S}_n の既約線形表現と指標に対する数論的側面	8
3.1	論文 [F60, 1900] での結果	8
3.2	論文 [F68, 1903] での結果	9
4	有限群の線形表現における数論的問題	9

1. Frobenius による有限群の指標と表現の一般理論における数論的側面	2
5 \mathfrak{S}_n の既約線形表現は \mathbb{Z} 上の行列で表し得る [S11]	11
5.1 \mathfrak{S}_n の既約指標	12
5.4 既約表現の実現 (表現空間の基底の選定) のための補題	13
5.5 誘導表現 $\Pi_\lambda = \text{Ind}_{\mathfrak{S}_\lambda}^{\mathfrak{S}_n} 1_{\mathfrak{S}_\lambda}$ の空間の基底の選定	14
5.6 Satz I の証明のための主定理	16
6 Frobenius-Schur の共著 [F75, 1906] の結果	16
7 \mathfrak{S}_n の既約スピン表現が R 上で実現出来るための必要十分条件 [S58]	17

1 Frobenius による有限群の指標と表現の一般理論 における数論的側面

[F53] F. Frobenius, Über Gruppencharaktere, Sitzungsberichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1896, pp.985–1021.

[F54] —, Über die Primfactoren der Gruppendeterminante, Sitzungsberichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1896, pp.1343–1382.

[F56] —, Über die Darstellung der endlichen Gruppen durch lineare Substitutionen, Sitzungsberichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1897, pp.944–1015.

([F54] は Frobenius 全集における論文番号 54 を表す)

(1) Frobenius は論文 [F53, 1896] で, 一般の有限群 \mathfrak{g} に対して, Charakter (現代用語では既約指標) を方程式で定義した. それを現代風に解釈すると, 群環 $\mathbb{Z}[\mathfrak{g}]$ で, 不変元 (共役類上の関数に対応) の生成する部分環が可換になるが, その可換多元環の (1次元) 表現を指標と定義している.

そして (可換多元環の理論を使って) その方程式の解の個数が, \mathfrak{g} の共役類の個数 k に等しいことを示した.

また, $\mathfrak{S}_4, \mathfrak{A}_5, \mathfrak{S}_5$, および $\text{PSL}(2, \mathbb{Z}_p)$ (p 奇素数) に対して, すべての指標を具体的に計算した.

(2) 論文 [F54, 1896] では, 群行列式の研究を通して, 既約指標の性質, 例えば, 直交性, ℓ^2 ノルムなど, を示した. その最終節 §12 で, 一般の有限群 \mathfrak{g} に対して, 「その既約指標 $\chi^{(\kappa)}$ ($1 \leq \kappa \leq k$) の値 $\chi^{(\kappa)}(A)$ ($A \in \mathfrak{g}$) をすべて \mathbb{Q} に添加した体は何か」を問うて研究し, 次の定理を示した.

定理 1.1. 有限群 \mathfrak{g} の \mathbb{C} 上の線型既約表現 π に対して, 商 $|\mathfrak{g}| / \dim \pi$ は整数である (すなわち, 次元 $\dim \pi$ は位数 $|\mathfrak{g}|$ を割る).

(3) 論文 [F56, 1897] では, 群の線形表現を導入し, [F53] で方程式で定義した指標が, 既約線形表現のトレースに他ならないことを示した.

定理 1.1 の証明. Frobenius のもともとの証明 [F54] は, その §12 (pp.1369–1362) にあるが, これをコンパクトに再現するのは難しい.

そこで, 後に Schur が表現論の基本を再構成した論文

[S7, 1905] I. Schur, Neue Begründung der Theorie der Gruppencharacteren, Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften 1905, Physikalisch-Mathematische Klasse, pp.406–432.

の §5, pp.413–417, から該当部分を抜き出して意識してみよう. まず命題 (p.416) は,

(XV) *Der Grad jeder irreduziblen Darstellung der Gruppe \mathfrak{H} ist ein Divisor der Ordnung der Gruppe.*

証明. 非常に簡明な証明である. χ を任意の既約指標とする. χ は p.425 (VIII.) により, 次を満たす. $E \in \mathfrak{H}$ を単位元とすると, $f := \chi(E)$ は χ に対応する既約線形表現 π の次元 $\dim \pi$ であり,

$$(VIII.) \quad \sum_{R \in \mathfrak{H}} \chi(SR^{-1})\chi(R) = \frac{h}{f}\chi(S), \quad h := |\mathfrak{H}|, \quad (S \in \mathfrak{H}).$$

ε_S を $E \in \mathfrak{H}$ で値 1 をとる \mathfrak{H} 上の δ 関数とし, 上を書き直すと,

$$\sum_{R \in \mathfrak{H}} \left(\chi(SR^{-1}) - \frac{h}{f}\varepsilon_{SR^{-1}} \right) \chi(R) = 0.$$

従って, $S, R \in \mathfrak{H}$ を動かしたときの $h \times h$ 型の係数行列式をとって,

$$\left| \chi(SR^{-1}) - \frac{h}{f}\varepsilon_{SR^{-1}} \right| = \left| (\chi(SR^{-1}))_{S, R \in \mathfrak{H}} - \frac{h}{f}E_h \right| = 0,$$

ここに, E_h は $h \times h$ 型単位行列. よって, $x = h/f$ は方程式

$$(1.1) \quad x^h + c_1x^{h-1} + \cdots + c_{h-1}x + c_h = 0$$

の解である. ここに, 係数 c_1, \dots, c_h は $\chi(R)$ の多項式で表される.

補題 1.2. 任意の $R \in \mathfrak{H}$ に対し, 指標値 $\chi(R)$ は代数的整数である.

証明. $R^m = E$ とすると, $\pi(R)^m = E_f$. $\pi(R)$ は対角化可能だから, 対角化すると $\text{diag}(\rho_1, \rho_2, \dots, \rho_f)$, $\rho_j^m = 1$, である. 各 ρ_j は代数的整数であり, その和 $\chi(R) = \rho_1 + \cdots + \rho_f$ もそうである. \square

Schur の証明が拠り所としている初等数論の命題は次である:

命題 1.3 (根拠命題). 変数 x の方程式 (1.1) において, 係数 c_1, \dots, c_h が代数的整数とすると, その根は代数的整数である.

この命題により, $x = h/f$ は代数的整数である. しかも有理数でもある. 従って整数である. 【定理 1.1 証了】

2 Frobenius の証明 [F54] の根拠, Dedekind の定理

定理 1.1 の, Frobenius のもとの証明 ([F54], §12) の根拠は下の Dedekind の論文に現れる **Satz V** である:

[Dede] R. Dedekind, Über einem arithmetischen Satz von Gauß, Mitteilung der Deutschen mathematischen Gesellschaft in Prag, 1892, pp.1–11 (Werke 2, 28–38).

この論文はなかなか面白いので, 原文を意識してみよう (なお以下で H1, H2, ... は Hirai が勝手に作った見出しである).

2.1 Gauß, Disquisitiones Arithmeticae, Art. 42

まず, Gauß の次の定理の観察から始める.

Satz I. *Wenn die Koeffizienten der beiden ganzen Funktionen*

$$\begin{aligned} P &= x^m + p_1x^{m-1} + p_2x^{m-2} + \cdots + p_m, \\ Q &= x^n + q_1x^{n-1} + q_2x^{n-2} + \cdots + q_n \end{aligned}$$

der Variablen x rationale, aber nicht sämtlich ganze Zahlen sind, so können auch die Koeffizienten ihres Produkts

$$PQ = x^{m+n} + r_1x^{m+n-1} + \cdots + r_{m+n}$$

nicht sämtlich ganze Zahlen sein.

対偶. P, Q を最高次係数が 1 の \mathcal{Q} -係数多項式とする.
積 PQ が \mathcal{Z} -係数 $\implies P, Q$ ともに \mathcal{Z} -係数.

証明. p_i を既約分数に書いて, $p_i = p'_i/p''_i$, としたときに, 分母 p''_i の最小公倍数 (すなわち, 共通分母) をとって, a_0 とする. Q および PQ についても同様の共通分母をそれぞれ b_0, c_0 とする. 共通分母を払うと,

$$\begin{aligned} A &:= a_0P = a_0x^m + a_1x^{m-1} + \cdots + a_m, \quad a_i = a_0p_i \quad (i \in I_m), \\ B &:= b_0Q = b_0x^n + b_1x^{n-1} + \cdots + b_m, \quad b_i = b_0q_i \quad (i \in I_n), \\ C &:= c_0PQ = c_0x^{m+n} + c_1x^{m+n-1} + \cdots + c_{m+n}. \end{aligned}$$

主張 H1. A, B, C はいずれも原始多項式である.

定義 H1. \mathcal{Z} -係数多項式

$$A = a_0x^m + a_1x^{m-1} + a_2x^{m-2} + \cdots + a_m$$

が原始的 (ursprüngliche, primitive) とは, a_0, a_1, \dots, a_m に共通因数が無いこと.

証明. A につき述べる. 素因数 r に対し, a_0 は, r^ν ($\nu > 0$) で割れるが $r^{\nu+1}$ では割れないとする. このとき, どれかの分母 p_i が r^ν で割れるが $r^{\nu+1}$ では割れない.

$a_i = a_0 p_i = \frac{a_0}{p_i'} \cdot p_i''$ において, $\frac{a_0}{p_i'}$ にはもはや素因数 r は現れない. また, p_i'' は p_i' と互いに素なので, r を含まない. よって, この $i \in I_m$ に対し, a_i は素因数 r を含まない. \square

主張 H2. $a_0 b_0 = c_0$.

証明. $a_0 b_0$ に入っている素因子の冪 r^c をとる. 多項式 A の係数を mod r で考えると,

$$\begin{aligned} A &\equiv \alpha_0 x^a + \alpha_1 x^{a-1} + \dots + \alpha_a, \\ B &\equiv \beta_0 x^b + \beta_1 x^{b-1} + \dots + \beta_b, \end{aligned}$$

とおくと, $\alpha_0 \neq 0, \beta_0 \neq 0$. すると,

$$AB \equiv \alpha_0 \beta_0 x^{a+b} + (\alpha_0 \beta_1 + \alpha_1 \beta_0) x^{a+b-1} + \dots + (\alpha_{a-1} \beta_b + \alpha_a \beta_{b-1}) x + \alpha_a \beta_b \neq 0.$$

従って, $a_0 b_0$ の任意の素因子 r に対し, 多項式 AB の係数でそれを含まないものが 1 つはある. AB は \mathbb{Z} -係数であり,

$$PQ = \frac{1}{a_0 b_0} \cdot AB$$

よって, $c_0 = a_0 b_0$ を得る. \square

Satz I の証明. 仮定により, $c_0 = 1$. 主張 H2 により, $a_0 b_0 = c_0 = 1 \therefore a_0 = b_0 = 1$. \square

Satz II. 2つの原始多項式の積は, また原始的.

主張 H3. Satz II \iff 「主張 H2」

定義 H2. \mathbb{Z} -係数多項式

$$A = a_0 x^m + a_1 x^{m-1} + a_2 x^{m-2} + \dots + a_m$$

の共通因数 (Teiler) とは, 係数 a_0, a_1, \dots, a_m の共通因数のことである.

Satz III. (Dirichlets Vorlesungen über Zahlentheorie)

2つの Z -係数多項式 P, Q の積 PQ の共通因数は, P, Q それぞれの共通因数の積である.

証明. A, B それぞれの共通因数を横に除ければ, Satz II になる. \square

Satz IV. 2つの多項式 A, B の係数 a, b は有理数とする. 積 AB の係数 c がすべて整数ならば, 積 ab はつねに整数.

証明. 主張 H2 による. \square

2.2 代数的数と代数的整数の場合, Satz V

定義 H3. 代数的数とは, Q -係数多項式の根, 代数的整数 (ganze algebraische Zahl) とは, 整係数で最高次係数=1 の多項式の根.

(1) 代数的整数の全体は環をなす.

(2) ある数 a に対して, $\mu_1, \mu_2, \dots, \mu_n$ ($\exists \mu_j \neq 0$) と整数行列 $Z = (z_{ij})_{i,j \in I_n}$ が存在して,

$$a\mu_i = \sum_{j \in I_n} z_{ij} \mu_j \quad (i \in I_n),$$

となっているならば, a は代数的整数.

(\because) $\det(Z - aE_n) = 0.$ \square

Satz V. Wenn das Produkt AB aus zwei Funktionen A, B lauter ganze algebraische Koeffizienten besitzt, so ist jedes aus einem Koeffizienten von A und einem Koeffizienten von B gebildeten Produkt eine ganze algebraische Zahl.

意訳. 多項式 A, B の積 AB の全ての係数が代数的整数だとすると, A の任意の係数と B の任意の係数との積はつねに代数的整数である.

【この定理が, 定理 1.1 の根拠定理である.】

これの簡単な, 拡張可能な証明を与えるのが本論文 [Dede] の目的.

2.3 代数的数・代数的整数の場合の証明

特別な場合として, 次を示し, それから Satz V を出す (難しいことを使わない).

Satz VI. Wenn die ganze Funktion $f(x)$ lauter ganze algebraische Koeffizienten hat, und wenn ω irgendeine Wurzel der Gleichung $f(\omega) = 0$ bedeutet,

so hat auch die ganze Funktion

$$f_1(x) = \frac{f(x)}{x - \omega}$$

lauter ganze algebraische Koeffizienten.

証明.
$$f(x) = c_0x^k + c_1x^{k-1} + \cdots + c_k = (x - \omega)f_1(x),$$

$$f_1(x) = a_0x^{k-1} + a_1x^{k-2} + \cdots + a_{k-1},$$

とおくと, $c_0 = a_0$, $c_1 = -a_0\omega + a_1$, $c_2 = -a_1\omega + a_2$, ..., $c_k = -a_{k-1}\omega$.

$$(2.2) \quad a_r = c_0\omega^r + c_1\omega^{r-1} + \cdots + c_r \quad (0 \leq r \leq k-1),$$

$$(2.3) \quad c_0\omega^k = -c_1\omega^{k-1} - \cdots - c_k,$$

$$\therefore a_r\omega^s = c_0\omega^{r+s} + c_1\omega^{r+s-1} + \cdots + c_r\omega^s \quad (r+s < k),$$

$$a_r\omega^s = -c_{r+1}\omega^{s-1} - c_{r+2}\omega^{s-2} - \cdots - c_k\omega^{s-(k-r)} \quad (r+s \geq k).$$

故に, §2, (3) により, a_r は代数的整数. □

$$f(x) = c_0(x - \omega_1)(x - \omega_2) \cdots (x - \omega_k)$$

を勝手な, $(x - \omega_{i_1}), (x - \omega_{i_2}), \dots$ で逐次割ると, 勝手な $c_0\omega_{j_1}\omega_{j_2} \cdots \omega_{j_p}$ が代数的整数であることが分かる.

主張 H4. $c_0(1 + \omega_1)(1 + \omega_2) \cdots (1 + \omega_k)$ の勝手な展開項が代数的整数.

◆主張 H4 による Satz V の証明.

$$A = a_0(x - \alpha_1)(x - \alpha_2) \cdots (x - \alpha_m),$$

$$B = b_0(x - \beta_1)(x - \beta_2) \cdots (x - \beta_n),$$

と分解し, $k := m + n$, $c_0 := a_0b_0$,

$$f(x) := AB = c_0x^k + c_1x^{k-1} + \cdots + c_k \quad \text{とおく.}$$

$$\text{このとき, } f(x) = a_0b_0 \prod_{i \in I_m} (x - \alpha_i) \cdot \prod_{j \in I_n} (x - \beta_j)$$

であるから, 任意の積

$$c_0 \cdot \alpha_{i_1} \cdots \alpha_{i_p} \cdot \beta_{j_1} \cdots \beta_{j_q} = (a_0 \alpha_{i_1} \cdots \alpha_{i_p}) \cdot (b_0 \beta_{j_1} \cdots \beta_{j_q})$$

は, 代数的整数である. 他方, 任意の 2 つの係数の積 $a_i b_j$ はこれらのものの和であるから, 代数的整数である. 【Satz V の証明終わり】

注. Satz V のこの証明では, A, B の一次因子への分解を使っている. 論文 [Dede] ではこの「分解可能性」を使わない証明をこの後で与えている. それは代数関数の場合にも使える.

3 Frobenius による \mathfrak{S}_n の既約線形表現と指標に対する数論的側面

[F60] F. Frobenius Über die Charaktere der symmetrischen Gruppe, Sitzungsberichte der Königlich Preufischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1900, pp.516–534.

[F68] —, Über die charakteristischen Einheiten der symmetrischen Gruppe, Sitzungsberichte der Königlich Preufischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1903, pp.328–358.

3.1 論文 [F60, 1900] での結果

Frobenius は論文 [F60] で, 対称群 \mathfrak{S}_n に対し, その既約指標を分類し, 既約指標の計算法も与えた. まず, n の分割

$$\lambda = (\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_m), \lambda_1 \geq \lambda_2 \geq \dots \geq \lambda_m > 0, \sum_i \lambda_i = n,$$

をとり, その全体 P_n が既約表現の同値類を径数付けする. $\lambda = (\lambda_i)_{1 \leq i \leq m} \in P_n$ に対して, 直積群

$$(3.1) \quad \mathfrak{S}_\lambda := \mathfrak{S}_{\lambda_1} \times \mathfrak{S}_{\lambda_2} \times \dots \times \mathfrak{S}_{\lambda_m}$$

を標準的な方法で \mathfrak{S}_n に埋め込み, これと同一視する. \mathfrak{S}_λ の自明表現を $1_{\mathfrak{S}_\lambda}$ とおき, 誘導表現を作る:

$$(3.2) \quad \Pi_\lambda := \text{Ind}_{\mathfrak{S}_\lambda}^{\mathfrak{S}_n} 1_{\mathfrak{S}_\lambda}$$

これは, $\lambda = (n)$, $\mathfrak{S}_\lambda = \mathfrak{S}_n$, $\Pi_\lambda = 1_{\mathfrak{S}_n}$, 場合以外は可約である. $\lambda \in P_n$ の逆辞書式順序に従って, 帰納的に証明されるのだが, Π_λ には既約成分のうちのトップのものが重複度 1 で入っている. これを既約表現 π_λ とよぶ. $\lambda \in P_n$ に対する逆辞書式順序を具体的に書くと,

$$(n) < (n-1, 1) < (n-2, 2) < (n-2, 1, 1) < (n-3, 3) < (n-3, 2, 1) < \dots \\ \dots < (2, 1, 1, \dots, 1) < (1, 1, 1, \dots, 1, 1).$$

定理 3.1. n 次対称群 \mathfrak{S}_n の既約指標の値はつねに整数である (すなわち, \mathbb{Z} -valued).

原文: [F54, 1896], §12, p.77, ↓ 8–10:

... . Daher sind die Charaktere der symmetrischen Gruppe sämtlich ganze rationale Zahlen (vergl. die Beispiele $n = 4$ und 5 , [F53, 1896], §8).

3.2 論文 [F68, 1903] での結果

論文 [F68] で, \mathfrak{S}_n に対し, 次の結果を得た:

(3.2.a) \mathfrak{S}_n の既約表現 π_λ に対し, λ および その転置 λ' を用いて, π_λ の指標 χ_{π_λ} を計算する第 2 の方法 ([F60] における第 1 の方法より簡単な第 2 の方法), を与えた.

(3.2.b) 群環 $C[\mathfrak{S}_n]$ 内の, λ に対応する不変原始冪等元 (charakteristische Einheit, 現在で言う Young symmetrizer) を与えた.

それには A. Young の論文 [You1, 1901], [You2, 1902] を大いに参考にした. [F68], §8, p.265, ↑9-6, に次のように書かれている:

Die Eigenschaften der in Satz III definirten Function $\zeta(R)$ hat Hr. A. Young untersucht in zwei sehr beachtenswerthen Arbeiten *On Quantitative Substitutional Analysis*, Proceedings of the London Math. Soc., vol.33 und 34, im Folgenden Y.I und Y.II citirt.

定理 3.2. n 次対称群 \mathfrak{S}_n の任意の既約表現の行列要素をすべて有理数に出来る.

原文: [F68, 1903], in Introduction, p.245 ↓5-6,

. . . . Wie sich dabei zeigt, kann man die h linearen Substitutionen jeder primitiven Darstellung der symmetrischen Gruppe so wählen, dass ihre Coefficienten sämmtlich rationale Zahlen sind.

《旧正書法にて, sämmtlich = sämlich》

4 有限群の線形表現における数論的問題

上の論文 [F60], [F68], あとで論評する論文 [S9], [S11] に見るように, Frobenius や Schur は数論的な視点からも表現や指標を見ている. Schur はとくに, 論文

[S9, 1906] I. Schur, Arithmetische Untersuchungen über endliche Gruppen lineare Substitutionen, Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften 1906, Physikalisch-Mathematische Klasse, pp.164-184.

において, 有限群の線形表現の数論的局面を論じている.

有限群 \mathfrak{G} の C 上の既約線形表現 π をとり, その指標を χ とする. 指標値 $\chi(R)$ ($R \in \mathfrak{G}$) を有理数体 Q に添加した代数的数体を $Q(\chi)$ と書く. 指標 χ の (または表現 π の) **Schur index** とは, $Q(\chi)$ の m 次の拡大体 L で, π が L 上実現出来る, すなわち, 基底をうまくとればすべての $\pi(R)$ ($R \in \mathfrak{G}$) の行列要素が L から取れる, ような m の最小値 $m(\chi)$ である.

(一般の基礎体 Ω の場合も同様である.)

$\mathfrak{S} = \mathfrak{S}_n$ の場合には, 上述のように, Frobenius [F68] により, つねに $Q(\chi) = Q$, $m(\chi) = 1$, である.

上の Schur index の定義をより現代的に述べよう. 有限群 G の体 K 上の既約線形表現 ρ が K の任意の拡大体においても既約であるとき, 絶対既約という. G の K 上の任意の既約線形表現が絶対既約であるとき, K を G の分裂体 (splitting field) という. K を G の分裂体とすれば, K の任意の拡大体 L に対して, L 上の G の任意の既約表現は K 上で実現可能である.

定義 4.1. G を有限群, K をその分裂体, χ を K 上の既約線形表現の指標, k を指標値 $\chi(g)$ ($g \in G$) で生成される K の部分体, とする. χ の Schur index $m(\chi)$ は, 次の互いに同値なやり方で定義される:

- (1) k の m 次拡大体 L で π が L 上実現出来るような m の最小値,
 - (2) k 上の既約表現を K 上で考えたとき, π を既約成分に含むときの重複度.
- (Cf. Schur index of irreducible character - Groupprops)

さらに, ここまでのこの報文の流れで次のような問題が提起されている.

問題 A (既約表現の実現に関して) 次の条件を満たす最小の体 K を求めよ.

「 G の体 K 上の (有限次元) 線形表現がすべて完全可約であり, K の任意の拡大体の上の線形表現は K 上の線形表現に同値である。」

問題 B (指標環に関して) 次の条件を満たす最小の体 K を求めよ.

「指標の Z 線形結合全体を指標環と呼ぶ. 体 K 上の (有限次元) 線形表現がすべて完全可約であり, 体 K 上の表現の指標環が K の任意の拡大体の上の指標環に等しい。」

標数 0 の場合では, 体の代わりに, Z の拡大環を問題にすることも出来る.

問題 a 既約表現 π の行列表示 T_π をうまく実現したとき, その全ての行列要素を含む Z の有限次拡大環, または有理数体 Q の有限次拡大体, で最小のものは何か?

問題 b 各既約表現 π ($[\pi] \in \widehat{G}$) の指標の値 $\chi_\pi(g)$ ($g \in G$) をすべてを含む Z の有限次拡大環, または Q の有限次拡大体は何か?

注. M. Benard は, 論文 [Bena, 1976] において, unitary reflection groups (本書では複素鏡映群という) G に対して, 次の結果を与えた.

Theorem 1. *Let G be a unitary reflection group and let F be the field generated over Q by the values of the characters of G . Then each representation of G is similar to an F -representation.*

5 \mathfrak{S}_n の既約線形表現は \mathbb{Z} 上の行列で表し得る [S11]

[S11, 1908] I. Schur, Über die Darstellung der symmetrischen Gruppe durch lineare homogene Substitutionen, Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften 1908, Physikalisch-Mathematische Klasse, 664–678.

Schurはこの論文 [S11, 1908] で、次を証明した：

「 $n \geq 3$ のとき、対称群 \mathfrak{S}_n のどの既約表現も、すべての行列要素が整数であるような行列表示を持つ」(ただしこれはユニタリ行列による表示ではない)

Frobenius は [F60, 1900] で、各 $\lambda = (\lambda_j)_{1 \leq j \leq m} \in P_n$ に対して、誘導表現

$$\Pi_\lambda = \text{Ind}_{\mathfrak{S}_\lambda}^{\mathfrak{S}_n} \mathbf{1}_{\mathfrak{S}_\lambda}, \quad \mathfrak{S}_\lambda = \mathfrak{S}_{\lambda_1} \times \mathfrak{S}_{\lambda_2} \times \cdots \times \mathfrak{S}_{\lambda_m} \hookrightarrow \mathfrak{S}_n,$$

のトップ既約成分として、既約表現 π_λ を与えたが、 π_λ の表現空間は、 Π_λ の表現空間の商空間であり、使いやすい基底を厳密には書き下せない。

そこで、Schur は π_λ の表現空間を、ある多項式の空間の商空間として実現し、良い性質を持つ基底を具体的に構成し、その基底に関して、単純互換 s_i ($i \in I_{n-1}$) の作用が整数係数で表されることを示した。

[S11] の **Introduction**, 1~4行目, 11~13行, 14~23行, の原文を引用する。

(1) Eine genaue Übersicht über die irreduziblen Gruppen linearer homogener Substitutionen \mathfrak{S}_n , die der symmetrischen Gruppe n^{ten} Grades \mathfrak{S}_n isomorph sind, hat zuerst Hr. Frobenius durch Bestimmung der Characteren von \mathfrak{S}_n gewonnen. [F60, 1900]

意訳. Frobenius は [F60] で、対称群 \mathfrak{S}_n と同型な既約線形群 \mathfrak{S}_n についての詳しい結果を、 \mathfrak{S}_n の既約指標の研究を通じて、与えた。(これは既約表現の分類を意味する)

(2) Eine weitere Methode zur Berechnung der Charaktere von \mathfrak{S}_n und der Gruppen \mathfrak{S}_n hat Hr. Frobenius in seiner Arbeit [F68] gegeben. In dieser Arbeit, hat Hr. Frobenius auch zuerst den Satz ausgesprochen, daß

jede der Gruppen \mathfrak{S}_n bei passender Wahl der Variablen als eine Gruppe mit rationalen Koeffizienten geschrieben werden kann. [F68, 1903, p.328]

意訳. さらに、論文 [F68] において、Frobenius は、 \mathfrak{S}_n の既約指標と(行列)群 \mathfrak{S}_n (平井注. 対応する既約表現による \mathfrak{S}_n の像) の別の計算法を与えた、また初めて次の定理を証明した：既約表現は適当な基底を選べば、有理数係数(有理数行列)で書ける。

(3) In der vorliegenden Arbeit soll nun genauer gezeigt werden, daß sich jede der irreduziblen Gruppen \mathfrak{S}_n bei geeigneter Wahl der Variablen auch als eine Gruppe mit *ganzzahligen* rationalen Koeffizienten darstellen läßt. , so ergibt sich zugleich der Satz:

Jede Gruppe linearer homogener Substitutionen, die der symmetrischen Gruppe n^{ten} Grades isomorph ist, läßt sich durch eine lineare Transformation der Variablen in eine Gruppe mit ganzzahligen rationalen Koeffizienten überführen.

意訳. 当論文では, より詳しく, 「 \mathfrak{S}_n の任意の既約表現は適当な基底に関して, \mathbb{Z} 係数で書ける」を示した. (平井注. \mathfrak{S}_n の任意の既約線形表現は \mathbb{Z} 上の行列で書ける.)

[11, 1908] の記号に関する注意. n の分割 $\lambda = (\lambda_i)_{1 \leq i \leq m}$ に対して, [11] では, x_1, x_2, \dots, x_n の多項式の空間に具体的な基底を決める都合で, 成分 λ_j の大小順を $\lambda_1 \leq \lambda_2 \leq \dots \leq \lambda_m$ としてある (ここでは Schur 方式という). これを, Frobenius 方式 $\lambda_1 \geq \lambda_2 \geq \dots \geq \lambda_m$ に従って書き直して行くことを試みたが, 途中で断念せざるを得なかった. Frobenius 方式の (λ_j) と Schur 方式とを移り合うには, λ_j の添字を $j \leftrightarrow m+1-j$ ($1 \leq j \leq m$) と付け換えればよい (すなわち, 成分の並べ方 = 添字の付け方, を左右反転すればよい).

5.1 \mathfrak{S}_n の既約指標

n の分割 $\lambda = (\lambda_i)_{1 \leq i \leq m}$ に対して, $0 < \lambda_1 \leq \lambda_2 \leq \dots \leq \lambda_m$ (Schur 方式) としておく.

$R \in \mathfrak{S}_n$ の共役類 $[R]$ は R のサイクル分解におけるサイクルの長さの組 $\alpha = [\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n] = 1^{\alpha_1} 2^{\alpha_2} \dots n^{\alpha_n}$ により決まる. 表現 Π に対して, 指標 $\chi_\Pi(R) =: \chi_\Pi(\alpha)$ の **Charakteristik** (指標の母関数ともいう) とは,

$$(5.1) \quad \Phi_\Pi(s) := \sum_{\alpha_1 + 2\alpha_2 + \dots + n\alpha_n = n} \frac{\chi_\Pi(\alpha)}{\alpha_1! \alpha_2! \dots \alpha_n!} \left(\frac{s_1}{1}\right)^{\alpha_1} \left(\frac{s_2}{2}\right)^{\alpha_2} \dots \left(\frac{s_n}{n}\right)^{\alpha_n}.$$

$\lambda \in P_n$ に対応する既約表現 π_λ の指標を $\chi_\alpha^\lambda := \chi_{\pi_\lambda}(R)$ とおく. その **Charakteristik** (母関数) は,

$$(5.2) \quad \Phi_\lambda(s) := \sum_{\alpha_1 + 2\alpha_2 + \dots + n\alpha_n = n} \frac{\chi_\alpha^\lambda}{\alpha_1! \alpha_2! \dots \alpha_n!} \left(\frac{s_1}{1}\right)^{\alpha_1} \left(\frac{s_2}{2}\right)^{\alpha_2} \dots \left(\frac{s_n}{n}\right)^{\alpha_n},$$

であり, $\Phi_\lambda(s_1, 0, \dots, 0) = \frac{\chi_{[n, 0, \dots, 0]}^\lambda}{n!} s_1^n = f_\lambda \cdot \frac{s_1^n}{n!}$, $f_\lambda := \dim \pi_\lambda$.

$$f_\lambda = \frac{n!}{\lambda_1!(\lambda_2+1)!\cdots(\lambda_m+m-1)!} \prod_{\alpha < \beta} (\lambda_\beta + \beta - \lambda_\alpha - \alpha).$$

$$(5.3) \quad p_n := \sum_{\alpha_1+2\alpha_2+\cdots+n\alpha_n=n} \frac{1}{\alpha_1!\alpha_2!\cdots\alpha_n!} \left(\frac{s_1}{1}\right)^{\alpha_1} \left(\frac{s_2}{2}\right)^{\alpha_2} \cdots \left(\frac{s_n}{n}\right)^{\alpha_n} \quad (n \geq 1),$$

[\mathfrak{S}_n の自明表現 $1_{\mathfrak{S}_n}$ の指標 $1_{\mathfrak{S}_n}$ の Charakteristik]

$p_0 := 1, p_n := 0 (n < 0),$ とおけば,

$$(5.4) \quad \Phi_\lambda(s) = \begin{vmatrix} p_{\lambda_1} & p_{\lambda_1-1} & \cdots & p_{\lambda_1-m+1} \\ p_{\lambda_2+1} & p_{\lambda_2} & \cdots & p_{\lambda_2-m+2} \\ \cdot & \cdot & \cdots & \cdot \\ p_{\lambda_m+m-1} & p_{\lambda_m+m-2} & \cdots & p_{\lambda_m} \end{vmatrix} \quad (\text{Schur の学位論文}).$$

$\frac{\partial p_\nu}{\partial s_1} = p_{\nu-1}$ であるから, 上式の両辺を微分して,

$$\frac{\partial \Phi_\lambda}{\partial s_1} = \Phi_{\lambda_1-1, \lambda_2, \dots, \lambda_m} + \Phi_{\lambda_1, \lambda_2-1, \lambda_3, \dots, \lambda_m} + \cdots + \Phi_{\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_{m-1}, \lambda_m-1},$$

$$(5.5) \quad f_\lambda = f_{\lambda_1-1, \lambda_2, \dots, \lambda_m} + f_{\lambda_1, \lambda_2-1, \lambda_3, \dots, \lambda_m} + \cdots + f_{\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_{m-1}, \lambda_m-1}.$$

◆ 誘導表現 $\Pi_\lambda = \text{Ind}_{\mathfrak{S}_\lambda}^{\mathfrak{S}_n} 1_{\mathfrak{S}_\lambda}$ の Charakteristik は $p_\lambda = p_{\lambda_1} p_{\lambda_2} \cdots p_{\lambda_m}$ であると言ってよい (実際にはこれからすぐ決まる).

<<§2, §3 は省略>>

5.4 既約表現の実現 (表現空間の基底の選定) のための補題

$C[x_1, x_2, \dots, x_n]$ の \mathfrak{S}_n -部分環

$$(5.6) \quad \Gamma^{(p)} := \langle x_1 x_2 \cdots x_{p-1} (x_p + x_{p+1} + \cdots + x_n) \rangle_{C[\mathfrak{S}_n]}$$

$$= \langle x_{i_1} x_{i_2} \cdots x_{i_{p-1}} (x_{j_1} + x_{j_2} + \cdots + x_{j_{n-p+1}});$$

$$\{i_1, \dots, i_{p-1}, j_1, \dots, j_{n-p+1}\} = \{1, 2, \dots, n\} \rangle_C.$$

$$\Gamma^{(1)} = C(x_1 + x_2 + \cdots + x_n).$$

$$(5.7) \quad C_{\nu_1, \nu_2, \dots, \nu_r}^{(p)} := \sum_{\{i_1, \dots, i_p\} \subset \{\nu_1, \nu_2, \dots, \nu_r\}} x_{i_1} x_{i_2} \cdots x_{i_p} \quad (r \geq p),$$

$$C_{\nu_1, \nu_2, \dots, \nu_r}^{(p)} := 0 \quad (r < p).$$

補題 5.1. $\{\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_p, \beta_1, \dots, \beta_{n-p}\} = \{1, 2, \dots, n\}$ とすると,

$$(5.8) \quad x_{\alpha_1} x_{\alpha_2} \cdots x_{\alpha_p} \equiv (-1)^p C_{\beta_1, \beta_2, \dots, \beta_{n-p}}^{(p)} \pmod{\Gamma^{(p)}}.$$

証明. $p = 1$ では, $\Gamma^{(1)} = C(x_1 + x_2 + \cdots + x_n), C_{2, 3, \dots, n}^{(1)} = x_2 + x_3 + \cdots + x_n,$ なので OK.

あとは, Induction on $p.$ □

公式 5.1. 変数 x_1 の現れ方：

$$(5.10) \quad F^\lambda = F_1^{(\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_m)} := x_1^{m-1} F_2^{(\lambda_1-1, \lambda_2, \dots, \lambda_m)} + x_1^{m-2} F_2^{(\lambda_1, \lambda_2-1, \lambda_3, \dots, \lambda_m)} \\ + \dots + x_1 F_2^{(\lambda_1, \dots, \lambda_{m-1}-1, \lambda_m)} + F_2^{(\lambda_1, \dots, \lambda_{m-1}, \lambda_m-1)},$$

$$\text{ここに, } \lambda_1 = 1 \text{ のとき, } F_2^{(\lambda_1-1, \lambda_2, \dots, \lambda_m)} := F_2^{(\lambda_2, \dots, \lambda_m)}$$

$$\lambda_{\kappa-1} = \lambda_\kappa \text{ のとき, } F_2^{(\lambda_1, \dots, \lambda_{\kappa-1}, \lambda_\kappa-1, \dots, \lambda_m)} := 0,$$

... ..

変数 x_{n-2} の現れ方：

$$F_{n-2}^{(3)} := 1, \quad F_{n-2}^{(1,2)} := x_{n-2} F_{n-1}^{(2)} + F_{n-1}^{(1,1)} = x_{n-2} + x_{n-1},$$

$$F_{n-2}^{(1,1,1)} = x_{n-2}^2 F_{n-1}^{(1,1)} = x_{n-2}^2 x_{n-1},$$

$$\text{変数 } x_{n-1} \text{ の現れ方: } F_{n-1}^{(2)} := 1, \quad F_{n-1}^{(1,1)} := x_{n-1}.$$

変数 x_n は現れない.

例 5.1. $F^{(1, n-1)} = x_1 + x_2 + \dots + x_{n-1}, \quad A^{(1, n-1)} = \langle x_1 + x_2 + \dots + x_n \rangle_{\mathcal{C}},$
 $f_{(1, n-1)} = n-1, \quad \langle x_j; 1 \leq j \leq n-1 \rangle_{\mathcal{C}} \pmod{A^{(1, n-1)}}.$

$$F^{(2, n-2)} = x_1(x_2 + \dots + x_{n-1}) + x_2(x_3 + \dots + x_{n-1}) + \dots + x_{n-3}(x_{n-2} + x_{n-1}),$$

$$A^{(2, n-2)} = \langle x_i(x_1 + \dots + x_n) - x_i^2; 1 \leq i \leq n \rangle_{\mathcal{C}},$$

$$f_{(2, n-2)} = \frac{1}{2}(n-1)(n-2) - 1 = \frac{1}{2}n(n-3),$$

$$\{x_\alpha x_\beta; 1 \leq \alpha < \beta < n, \alpha \leq n-3\} \pmod{A^{(2, n-2)}}.$$

補題 5.2. 多項式 F^λ に現れる単項式を $X_1, X_2, \dots, X_{f'}$ とすると, $f' = f_\lambda = \dim \pi_\lambda$.

証明. F^λ の帰納的構成法から f' の帰納公式を書き下すと,

$$f' = f_{\lambda_1-1, \lambda_2, \dots, \lambda_m} + f_{\lambda_1, \lambda_2-1, \lambda_3, \dots, \lambda_m} + \dots + f_{\lambda_1, \dots, \lambda_{m-1}, \lambda_m-1}.$$

(5.5) 式により, $f' = f_\lambda = f$ を得る. □

Satz I (§5, p.674). 単項式 $X^{(\alpha)}$ は $\pmod{A_\lambda}$ によつて, $X_1, X_2, \dots, X_{f'}$ の整係数 1 次結合に合同である.

5.6 Satz I の証明のための主定理

主定理 (Satz IV, §6, p.677). \mathfrak{S}_n の既約表現 π_λ ($\lambda \in P_n$) は次のように実現出来る. \mathfrak{S}_n -module $P_\lambda := M_\lambda \bmod A_\lambda$ の基底は, 多項式 F^λ に現れる単項式を X_1, X_2, \dots, X_f ($f = f_\lambda$) を $\bmod A_\lambda$ で考えれば得られる. このとき, 任意の $R \in \mathfrak{S}_n$ に対して, 整数 $c_{\alpha\beta}$ が存在して,

$$\pi_\lambda(R)X_\alpha \equiv c_{\alpha 1}X_1 + c_{\alpha 2}X_2 + \cdots + c_{\alpha f}X_f \pmod{A_\lambda}.$$

上でいろいろ準備してあるが, この定理の証明を最後まで書くのは, 長くなり過ぎるので省略する.

6 Frobenius-Schur の共著 [F75, 1906] の結果

[F75] G. Frobenius und I. Schur, Über die reellen Darstellungen der endlichen Gruppen, Sitzungsberichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1906, pp.186–208.

序文. 表現 $\pi(R)$ ($R \in \mathfrak{H}$) の共役表現 (konjugierte Darstellung) とは, $\pi^t(R) := {}^t\pi(R^{-1})$ ($R \in \mathfrak{H}$) である.

(平井注. π がコンパクト群の有限次元行列表現のとき, $\bar{\pi}(R) := \overline{\pi(R)}$ ($R \in \mathfrak{H}$) [各行列要素の複素共役] とおけば, $\pi^t \cong \bar{\pi}$ である.)

- (1) 群 \mathfrak{H} の C 上の既約表現は次の3種に分けられる [F75, §2].
1. R 上の既約表現に同値なもの (1種とよぶ),
 2. R 上の既約表現に同値でないが, $\pi^t \cong \pi$ のもの (2種とよぶ),
 3. R 上の既約表現に同値でなく, $\pi^t \not\cong \pi$ のもの (3種とよぶ).

(2) 有限群 \mathfrak{H} の既約表現 π に対して,

(2a) $\chi_\pi(\mathfrak{H}) \subset \mathbf{R} \iff \pi$ は1種または2種,

(2b) (§4) π が1,2,3種に従って, $c_\pi = +1, -1, 0$ とおくと,

$$(6.11) \quad \sum_{R \in \mathfrak{H}} \chi_\pi(R^2) = c_\pi h, \quad h = |\mathfrak{H}|.$$

(2c) (§4) $\zeta(R) := \#\{S \in \mathfrak{H}; S^2 = R\}$ とおくと,

$$(6.12) \quad \sum_{[\pi] \in \mathfrak{H}} c_\pi \chi_\pi(R) = \zeta(R),$$

7 \mathfrak{S}_n の既約スピン表現が R 上で実現出来るための必要十分条件 [S58]

[S58, 1927] J. Schur, Über die reellen Kollineationsgruppen, die der symmetrischen oder der alternierenden Gruppe isomorph sind, Journal für die reine und angewandte Mathematik, 158 (1927), 63–79.

対称群 \mathfrak{S}_n のスピン既約表現 π が実数体 R 上での行列表示 T_π を持つための必要十分条件を与えている.

Shifted Young diagram of degree n (= strict partition of n):

$$(7.1) \quad \nu = (\nu_j)_{1 \leq j \leq m}, \quad n = \nu_1 + \nu_2 + \cdots + \nu_m, \quad \nu_1 > \nu_2 > \cdots > \nu_m > 0$$

その全体を SP_n とおく. $\nu \in SP_n$ に対応する ([S16, 1911] での) スピン既約表現を τ_ν と書く. $\text{sgn}_{\mathfrak{S}_n}$ を \mathfrak{S}_n の符号表現とすると, $\text{sgn}_{\mathfrak{S}_n} \cdot \tau_\nu \cong \tau_\nu$, または, $\neq \tau_\nu$, に従って, τ_ν を自己同伴または非自己同伴という. τ_ν が自己同伴であるための必要十分条件は, “ $n - m$ が偶数” である.

序文. \mathfrak{S}_n の線形既約表現 π_λ ($\lambda \in P_n$) は, 整数環上の行列で, 実現出来る [S11]. しかし, スピン既約表現については, この種の研究は非常に難しい. そこで, τ_ν ($\nu \in SP_n$) に対しては, 実数体上で実現出来るかどうかを問う. ここでは Frobenius-Schur [F75, 1906] の判定法 (2b) を使う.

Satz I (in Introduction). τ_ν が実数体上実現可能であるための必要十分条件は, $n - m \equiv 0, 1, 2, 6, 7 \pmod{8}$, である.

系. \mathfrak{S}_n のすべてのスピン既約表現が実数体上で実現可能であるのは, $n = 1, 2, 3, 9, 10, 11, 19$, に限る.

Satz V (in §7). 交代群 \mathfrak{A}_n のスピン既約表現で, $\nu \in SP_n$ に対応するものが, 実数体上実現可能であるための必要十分条件は, “ $n - m \equiv 0, 1, 7 \pmod{8}$ ” である.

例 7.1.

n	SP_n (n の厳格分割)
5	(5), (4, 1), (3, 2)
6	(6), (5, 1), (4, 2), (3, 2, 1)
7	(7), (6, 1), (5, 2), (4, 3), (4, 2, 1)
8	(8), (7, 1), (6, 2), (5, 3), (5, 2, 1), (4, 3, 1)
9	(9), (8, 1), (7, 2), (6, 3), (6, 2, 1), (5, 4), (5, 3, 1), (4, 3, 2)
10	(10), (9, 1), (8, 2), (7, 3), (7, 2, 1), (6, 5), (6, 4, 1), (6, 3, 2), (5, 4, 1), (5, 3, 2), (4, 3, 2, 1)
11	(11), (10, 1), (9, 2), (8, 3), (8, 2, 1), (7, 4), (7, 3, 1), (6, 5), (6, 4, 1), (6, 3, 2), (5, 4, 2), (5, 3, 2, 1), (5, 4, 2), (5, 3, 2, 1)
12	(12), ..., (5, 4, 2, 1)
13	(13), ..., (5, 4, 3, 1)
14	(14), ..., (5, 4, 3, 2)
15	(15), ..., (5, 4, 3, 2, 1)
16	(16), ..., (6, 4, 3, 2, 1)
17	(17), ..., (6, 5, 3, 2, 1)
18	(18), ..., (6, 5, 4, 2, 1)
19	(19), (18, 1), (17, 2), (16, 3), (16, 2, 1), (15, 4), (15, 3, 1), (14, 5), (14, 4, 1), (14, 3, 2), (13, 6), (13, 5, 1), (13, 4, 2), (12, 7), (12, 6, 1), (12, 5, 2), (12, 4, 3), (12, 4, 2, 1), (11, 8), (11, 7, 1), (11, 6, 2), (11, 5, 3), (11, 5, 2, 1), (11, 4, 3, 1), (10, 9), (10, 8, 1), (10, 7, 2), ..., (9, 4, 3, 2, 1), (8, 5, 3, 2, 1), (7, 6, 3, 2, 1), (7, 5, 4, 2, 1), (6, 5, 4, 3, 1)
20	(20), ..., (6, 5, 4, 3, 2)
21	(21), ..., (6, 5, 4, 3, 2, 1)

参考文献

Frobenius 全集での論文番号 53 は [F53] と記し, Schur 全集での論文番号 4 は [S4] と記す.

[Bena,1976] M. Benard, Schur indices and splitting fields of the unitary reflection groups, *J. Algebra*, **38**(1976), 318-342.

[Dede] R. Dedekind, Über einem arithmetischen Satz von Gauß, Mitteilung der Deutschen mathematischen Gesellschaft in Prag, **1892**, pp.1-11 (Werke **2**, 28-38).

[F53] F. Frobenius Über Gruppencharaktere, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1896, pp.985-1021.

[F54] —, Über die Primfactoren der Gruppendeterminante, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1896, pp.1343-1382.

[F56] —, Über die Darstellung der endlichen Gruppen durch lineare Substitutionen, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1897, pp.944-1015.

[F60] —, Über die Charaktere der symmetrischen Gruppe, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1900, pp.516-534.

[F61] —, Über die Charaktere der alternierenden Gruppe, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1901, pp.303-315.

[F68] —, Über die charakteristischen Einheiten der symmetrischen Gruppe, Sitzungs-

7. S_n の既約スピン表現が R 上で実現出来るための必要十分条件 [S58] 19

berichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1903, pp.328–358.

次の [F75], [F76] は, Schur との共著 (Frobenius 全集第 3 巻より)

[F75] —, Über die reellen Darstellungen der endlichen Gruppen (mit I. Schur), Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1906, pp.186–208.

[F76] —, Über die Äquivalenz der Gruppen linearer Substitutionen (mit I. Schur), Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1906, pp.209–217.

[S1] J. Schur, Über eine Klasse von Matrizen, die sich einer gegebenen Matrix zuordnen lassen (Inaugural-Dissertation), 1901, Berlin, Reprinted in *Gesammelte Abhandlungen*, Band I, pp.1–71.

[S4]=[Sch1] J. Schur, Über die Darstellung der endlichen Gruppen durch gebrochene lineare Substitutionen, J. für die reine und angewante Mathematik, **127** (1904), 20–50.

[S6] J. Schur, Über eine Klasse von endlichen Gruppen linearer Substitutionen, Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften 1905, Physikalisch-Mathematische Klasse, pp.77–91.

[S7] I. Schur, Neue Begründung der Theorie der Gruppencharacteres, Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften 1905, Physikalisch-Mathematische Klasse, pp.406–432. [§2 に Schur の補題あり]

[S9] I. Schur, Arithmetische Untersuchungen über endliche Gruppen lineare Substitutionen, Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften 1906, Physikalisch-Mathematische Klasse, pp.164–184. [Schur index の研究]

[S10]=[Sch2] J. Schur, Untersuchungen über die Darstellung der endlichen Gruppen durch gebrochene lineare Substitutionen, J. für die reine und angewante Mathematik, **132** (1907), 85–137.

[S11] I. Schur, Über die Darstellung der symmetrischen Gruppe durch lineare homogene Substitutionen, Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften 1908, Physikalisch-Mathematische Klasse, pp.664–678.

[S14] I. Schur, Beiträge zur Theorie der Gruppen linearer homogener Substitutionen, American Mathematical Society Transactions, **10** (1909), 159–175.

[S16]=[Sch3] J. Schur, Über Darstellung der symmetrischen und der alternierenden Gruppen durch gebrochene lineare Substitutionen, J. für die reine und angewante Mathematik, **139** (1911), 155–255.

(注 : [S4], [S10], [S16] は射影表現三部作である)

[S58, 1927] J. Schur, Über die reellen Kollineationsgruppen, die der symmetrischen oder der alternierenden Gruppe isomorph sind, *ibid.*, **158** (1927), 63–79.

[You1, 1901] A. Young, Quantitative substitutional analysis, Proc. London Math. Soc., **33**(1901), 97–146.

[You2, 1902] A. Young, Quantitative substitutional analysis (2nd paper), Proc. London Math. Soc., **34**(1902), 361–397.